

## 短歌の形を借りた別のことなど 服部崇

年の暮れを短歌雑誌の二〇二二年一月号を読みながら過ごしている。「角川短歌」の新春特別座談会「短歌の継承と変化」（島田修三・米川千嘉子・穂村弘・横山未来子による座談会）では、世代間の分断に関する編集部問いに、島田が「さほど世代間ギャップは感じません」と否定するのが印象的だった。これに真っ向から対峙するのが「歌壇」の特集「気鋭歌人に問う、短歌の活路」に寄稿している奥田亡羊の「短歌地図が違う」。奥田は「歌壇の中にはいま大きな断層が生まれつつあることは確かだ」、「短歌の形を借りた別のことをやっているのだと思う」と言う。奥田は、若手歌人が同世代の短歌にしか関心を示さないこと、「カロリー高め」な歌を敬遠することに衝撃を受けたとする。私としては、前世代の歌集を読まないことを創造するための一つの方法として前向きに捉えたい。「短歌の形を借りた別のこと」が何になるのかを知りたいと思う。とはいえ、私自身はこうした危険な方法は採用しない。

同じ「歌壇」の特集の大井学「ことばの鮮度管理」は、一九四五年以降の短歌における過去二回の転回点を示し、さらに現在の表現の地点を照射する。第一の転回点は、塚本邦雄・岡井隆らによる「前衛短歌」であったとする。「近代短歌を支えていた私小説的な『わたし』のあり方を、作品世界を支える作中の『わたし』へと拡張し、かつ現実世界から切り離れた」とする。第二

の転回点は、俵万智『サラダ記念日』の出版とそのミリオンセラーであったとする。「歌の言葉はみやびなものや、難解なものではなくてよく、現代の『私たちの言葉』を使って書いているのだから」という、当たり前前の言葉の使い方が思い出された」とする。そして現在については、永井祐、谷川由里子の歌を引き、『わたし』の視点で描き出されるのは『あるある感』に満ちた現代の姿であり、その意味において読者は直接はその世界を体感的に想起することができる」とする。これらを踏まえ、大井は「言葉の鮮度を保持したまま、かつ日常の言葉から脱却するための方法論」を目指している。

大井は、第二の転回点の説明の際に「夕照はしづかに展くこの谷のPARCO三基を墓碑となすまで 仙波龍英」を引き、短歌に用いる言葉の鮮度の衰えに警鐘を鳴らす。PARCOではなく、LUMINEの話ではあるが、本稿執筆時、年末年始新ビジュアル“Creating Tomorrow”に工藤玲音の短歌が飾られている。

・来て 花を咲かせて虎を歩かせていまここにいるわたしに会い  
に 工藤 玲音

本人は自身のHPに「いわゆる『コピー』として短歌を作るのははじめてで、制作陣の皆様と打ち合わせを重ねながら作りました」と書く。私としては、「コピー」として短歌を作るのはどうかと思う反面、そこから何か生まれることもあるかとも思う。最後に、歌集『水中で口笛』から好きな歌を一首引いておく。歌集に「◎Rain KUDOU」とあることから察するに、この歌の「雨」は作者であると思われる。

・気まぐれだから雨はきらいというきみにとうもろこしのよう  
に 抱かれる 工藤 玲音